

CHINESE CULTURAL REVOLUTION; 50 YEARS

by Jisheng Yang

Copyright © by Jisheng Yang and Kogo Tsuji

This Japanese language edition published in 2019
by Iwanami Shoten, Publishers, Tokyo

日本の読者へ

中国でプロレタリア文化大革命(以下「文革」と略)が始まったのは一九六六年、終わったとされているのは一九七六年、ほぼ一代を超えた半世紀後の今日、本書『文化大革命五十年』が日本の読者の目に触れることになったことを大変うれしく思っている。本書は文字数の制約から拙著『天地翻覆——中国文化大革命史』(香港・天地圖書有限公司、二〇一六年、九十万字などを基礎として編纂し直して日本の読者にご覧にいれることになったもの)だが、ここから中国における文化大革命の概略を理解していただけたらと思う。

なお、本書の書名の元になった「天地翻覆」は毛沢東の詞「念奴嬌 鳥兒(鳥の)問答」(一九六五年)の一節「試みに看よ 天地翻覆するかを」に基づいている。この詞の意味するものについては第三部に記した(二〇四頁参照)。

一 文革から五十年、だがその研究はまだ十分ではない

一九六六年からの十余年、ほぼすべての中国人が、それぞれ異なる役割をもって、また異なる程度において、あの文革に巻き込まれ、それに加わったすべての人は骨身にしみる経験をした。彼らの生活、運命、魂はすべて深刻な影響を受けた。この政治運動が中国の政治、経済、社会に与えた影響にはさらに深いものがあつた。

中国大陸では文革研究はなおタブーとされ、五十年を経た今日でも文革の研究はまだ掘り下げられたものになっていない。文革中に発生した多くの事件の真相は今もなお明らかにされてはおらず、文革発生の原因とその結果への認識はまだ極めて皮相なものである。中国大陸の当局が審査出版した何冊かの「文革史」の基本は、官僚が被った被害の歴史であり、造反派の悪事の歴史である。こうした「文革史」は知識人の被害を紹介してはいるが、

知識人への迫害を使喚^{しきょう}した者が権力を握る者であったことを指摘してはいない。

文革初期に迫害された知識人は権力者によって「放り出された」ものである。「放り出された」モデルが出来たので政権は政治的標準を示すことが可能になり、それによって多くの知識人が迫害を受けた。だが文革中に迫害された一般庶民の数は迫害された幹部の数百倍にもなるであろう。恐怖の「紅い八月」⁽¹⁾、工作組の「反右闘争」⁽²⁾、一九六七年の「二月鎮庄」⁽³⁾、「二打三反」⁽⁴⁾、「五・一六」摘発・批判・審査⁽⁵⁾運動、「階級隊列の整頓」運動⁽⁶⁾、また一部地区での集団虐殺や文革後の大規模な摘発・批判・審査運動など、そのすべては権力を握る者が、権力を持たぬ者を鎮圧したことであった。

当局寄りの文革史は、権力無き者が文革中に受けた災禍についてはあっさりとは触れるだけか、極力歪曲している。文革中におきた諸事実の真相を解明し、文革を学術的に説明することは今日の学术界にとって重大な責務である。まさにそうした責任感に駆られ、今の中国でも多くの者が密かに文革研究を続けている。ひとたび学術と出版の自由が与えられるなら、その研究の成果が噴出するであろう。

二 改革開放後に現れた社会的な不正

毛沢東の死去後、文革がもたらした重大な社会的危機は政権を握る者に経済改革と対外開放を進めることを迫った。改革開放は中国経済を急速に発展させ、中国は地球上で第二の経済体となり、国力は増強し、人民の生活水平も向上した。しかし、各種の社会的勢力の動きが重なる中で、改革は経済の改革のみで、政治の改革は実施されなかった。

政治を動かす者は、文革を全面的に否定しながらも、毛沢東の政治的遺産を相続した。またもやあの政治イデオロギー、つまりマルクス主義と毛沢東思想、またもやあの道、つまり社会主義の道、またもやあの政治体制、つまり一党独裁と高度の集権化であった。毛沢東時代のこれらのことが文革発生の原因となり、文革失敗の原因にもなったのだが。まさに毛沢東のこうした遺産に頼ることによって毛沢東体制下での官僚集団(彼らの一族郎党、友人を含め)は改革開放の中で権力と権勢を握る新たな「権貴」集団(権力を持ち社会的身分の高い特権階級)となった。改革以後官僚たちが掌握した富はより大きく、彼らが享受するものは改革以前の官僚のそれをはるかに

超えるものである。官僚たちは特権を引き続き享受する他に、手中の権力を用いることで利益の最大化を追求してきた。

改革開放を通じて中国経済のパイは確かに大きくなった。しかし、パイの最も大きな分け前で一番おいしいところは官僚たちが手に入れた。改革のための元手を支払った民衆は、官僚たちのおこぼれにあずかっただけである。三十年になる改革によって樹立された制度は「社会主義市場経済」を名乗ってはいるが、実質は「権力市場経済」〔権力支配の市場経済〕とも「国家資本主義」とも呼んでよい）である。つまり国家の行政権力が市場を支配し、コントロールしている。この権力市場経済という制度下で大小の権力の核は、一つ一つが強大な吸引力をもつブラック・ホールのように、社会の富を権力と親密な関係をもつ社会集団へと吸い込んだのである。社会的公正は大幅に失われ、貧富の格差は急激に拡大している。権貴集団と一般民衆の間の矛盾は日増しに厳しいものとなりつつある。この社会的不正を前にして中国社会には二つの相対立する思潮が現れている。一部の人々（毛派）は、社会的不正の原因は毛沢東思想に反したためとしている。彼らは文革を指導した毛の思想を再び言

い立て、第二次文革をやる和高言している。別の一部の人々（自由主義者）は、社会的不正の原因は経済改革だけをやり、政治改革をしなかったことにあると考え、文革をもたらしただ理論、路線、制度を放棄し、民主的立憲政治を実現することを主張している。この二つの思潮は改革が社会的不正を生み出したことを認めながらも、その不正の原因と解決策について明らかに対立し、相いれようとしない。これら二つの思潮の間には、程度を異にする広範な中間地帯が存在している。

三 毛沢東左派は社会的不正をどう見ているか

二〇一五年二月五、六日、全国十三の省・市・自治区から来た毛派の共産主義者は河南省洛陽で会議を開いたこの会議では、①マルクス・レーニン・毛沢東主義、とくに社会主義革命、継続革命論に関する毛沢東主義の学習、②当代中国の社会の性質、階級関係、社会問題、社会の主要矛盾の分析と研究、③毛派共産主義者の当面の闘争戦術の分析と研究、という三つの議題が設けられた。この洛陽会議は「第一の任務はマルクス・レーニン・毛沢東主義理論を学習することである。学習を通じて

人々は『共産党宣言』の基本的原理は時代遅れではなく、同宣言は依然として我々毛派共産主義者の最も基本的な綱領であることを認識した。レーニンの『帝国主義論』は時代遅れではない。レーニンの時代分析、帝国主義の本質と特徴に関する分析は依然として我々が当面の世界情勢を認識するための理論的指導である。毛主席の社会主義革命論は、当面の修正主義の支配に反対し、資本主義の復活に反対を続ける直接的な理論的指導である」と確認しあつた。

この会議は「中国はすでに修正主義を政治的特徴とする官僚独占資本主義社会となつている。資本主義復活の程度はすでに当時（一九六〇—七〇年代）のソ連修正主義、社会帝国主義をはるかに超えている」、「この社会の政治的統治は、官僚独占資産階級が主導するすべてのブルジョア階級によるファシスト独裁政治である。工業・農業労働者階級はこの支配階級の独裁の対象となつている」と認めた（『中国毛派共産主義者洛陽会議紀要——中国の毛派共産主義者は連合しよう！』『紅色中国週刊』二〇一五年二月十七日、第五十六期）。

会議のコミュニケーションは「我々はまず以下のことを表明しなければならぬ。毛主席、我々はあなたのことを想

う！ 新たな苦しみを再び受けるあなたの労働者はあなたの旗を高く掲げ、修正主義と資本主義の統治を速やかに終結させ、中国においてマルクス・レーニン・毛沢東主義の科学的社会主义を再建する」と述べている。

四 自由主義者は社会的に不正をどう見ているか

自由主義の角度から見れば、「官僚集団」というのは中立的な言葉であり、それは階層的官僚制度の執行者である。だが、もし官僚集団の権力が民衆によつて与えられたものでなく、権力を抑制し、均衡させる制度がないとすれば、その階層制度の執行者は公務上の権力を使つて大衆を抑圧、搾取することができる。近代的民主制度があつてはじめて、官僚制の執行者が圧迫者、搾取者となり、「公共国家」が「抑圧国家」、「官僚国家」となることを防ぐことができる。自由主義者は比較的早くから改革開放後の社会的に不正な現象を指摘し、批判してきた。彼らは、計画経済時代の政治体制の下で市場経済をやるのが社会的に不正が発生する原因だとしてきた。経済は市場化したものの、権力構造とその運用方式は基本的になお計画経済時代の状態を維持している。

多くの経済活動においては官僚の審査批准が必要である。つまり土地、建設プロジェクト、融資、商品の輸入など、すべての利益をあげる機会についての審査批准のことである。さらに官僚の手中にある権力については必要な抑制均衡機能が欠けている。経済の指導部門はその審査批准権を市場で金銀に交換することができる。幹部人事を扱う部門、司法部門も黙って指を咥えてはいない。幹部の任免権の商品化(官職の売買)は一九九〇年代には始まっていた。新世紀に入り、司法権力の商品化が始まった。政策の不正はまさに社会的不正を招く一つの原因である。政策の不公平とは、政府の関係部門が制定する一部の政策が多数の、とくに底辺の庶民の利益を代表せず、少数の者の利益を図るための条件となることである。政策の不公平の原因は政策決定において民主化が欠けているためであり、それも文革が残した政治制度と関係がある。

自由主義者は、現代の中国人は権力が制約されない上部構造と資本が制約されない経済的基礎という二つの現実に直面せざるをえないと考えている。権力の濫用と資本の貪欲さが悪質に結合しているのが現代の中国の一切の罪悪が群がるところであり、また一切の社会的矛盾の

総合的根源である。その解決策は、権力を抑制均衡させ、資本を制約する制度を作り上げることであり、その制度こそが立憲民主政治なのである。ではどうやって立憲民主政治を実現するのか？自由主義者の間でも見解は異なっている。多くは漸進的改革という方法で逐次推進することを考えている。一部の者はカラー革命(二〇〇〇年以後、元共産圏諸国等で起きた自由化運動。運動のシンボルに色や花が使われた)によって一度で制度の転換を実現させると主張している。

五 執政当局はこの二つの動きに どう向き合っているか

この二つの思潮の背後には二種類の社会的勢力がある。一つの勢力は改革開放を否定し、毛の継続革命理論第三部第二章参照をもつて社会的公正の実現を望んでいる。もう一つの勢力は政治体制改革を推進し、専制制度から民主的立憲政治制度への転換を実現し、権力を抑制均衡させ、資本を制約するシステムで社会的公正を実現することを期待している。当局の側から見れば、この二つの勢力はいずれも現政権に対する脅威であり、社会の安定を破壊しうるものである。そこで「昔の道を歩まず、

邪^{よこしま}な道を歩まない」ことが提起されている。「昔の道を歩まない」とは毛派に対して、「邪な道を歩まない」は自由方式を唱える派に対抗するものである。当局は二つの勢力の極端な行動に対しては制圧を加え、穏やかな動きに対しては適宜に許容している。しかし毛派は元からあるイデオロギーを擁護する面で当局と共通するところがあるため、毛派に対してはいつも手心が加えられている。自由主義者は改革開放を支持し、当局はその力を借りることもできるが、常に自由主義者は「西側」、「資本主義」と結びつけられ自由主義への圧力の度合いは毛派へのそれを超えるものとなっている。

一九八一年六月二十七日、中国共産党十一期六中全会は「建国以来の党の若干の歴史的問題についての決議」〔以下「歴史決議」と略〕を採択し、文革という歴史段階について当局としての結論を下した。つまり文革は「指導者が間違つて引き起こし、反革命集団に利用されて、党と国家と各民族人民に大きな災難をもたらした内乱である」とされた。この結論は文化大革命を否定してはいる。だが、文革を生み出した理論、路線、制度は否定されなかった。上記の二つの思潮、二つの勢力の駆け引き、そして当局の態度はみな文革を生み出した理論、路線、制

度という核心的問題をめぐって展開されている。もし毛派が勢いをえるなら文革はまた異なる形で再演されるだろう。文革の悪夢は今なお中国にまつわりついている。文革の悪夢から逃れ、災禍の再来を避けることが中国が直面する重大な任務である。文革について科学的に、深く研究することはこの任務の一部である。拙著はこの任務のために微力を尽くすことを意図するものである。

最後になつたが、本書の編纂、出版を企画した辻康吾教授、また翻訳、編輯に参加した日本の友人各位に感謝したい。同時に嚴家祺・高舉著の『文化大革命十年史』など現代中国に関する重要な著作を出版してきた岩波書店に敬意を表したい。聞くところでは日本でも文革研究が続けられているとのことだが、文革研究が深まることで人々が真の中国を理解することができるようになる自信じている。

二〇一八年五月

楊 繼 緝

序 文

一 「歴史決議」は政治問題に関する決議

著名な作家王蒙*は「誰が一九六六年に始まった十年の『文革』を解釈し、さらに一步進めて政治的、理論的に総括できるのだろうか？ この仕事は中国人が当然なすべきである。中国共産党が当然なすべきである。中国の研究者が当然なすべきである。これは中国人の歴史的、国際的な責任である。中国はその責任を免れない。正しく、いささかも曖昧さを残すことなく『文革』のあらゆる側面を総括する。これもまた人類の歴史に対する中国の貢献である」(王蒙『中国天機』、二〇一二年、安徽文芸出版社)と述べている。王蒙が述べた「この仕事」は私にとってきわめて魅力的であり、かねてからやりたい心を躍らせていた。この仕事はきわめて複雑、かつ危険な領域にあったが、ひとたびそこに入ると、私はすぐに意欲が満ち溢れた。明らかに「この仕事」は大規模なものであり、私は「この仕事」に小さなレンガと瓦を一つ積

み足したただけではあるが、そのために力をつくしたつもりである。

一九六六年から一九六七年末まで、私は清華大学で学生として文革に参加した。この間、全国十数都市へ「申連」(経験交流)に赴き、身をもって文革初期の一部の事件を体験し、文革期の社会の雰囲気を感じ得た。一九六八年一月、私は新華社の記者となった。その後の数年、文革と関係する取材を行なった。だが自身の体験といい、取材といい、みな「木を見て森を見ない」もので、十年の文革への全面的な掘り下げた理解に欠けていた。文革への深い探究を進めることが私の長年の願いであった。二〇〇七年に『墓碑』(香港・天地圖書有限公司、二〇〇八年、伊藤正・田口佐紀子・多田麻美訳『毛沢東大躍進秘録』文藝春秋、二〇一二年、本書は大躍進期(一九五八―六一一年)の餓死事件研究)を書きあげたのち、私は文革研究へと向かった。文革の通史だけでもすでに多くの書籍が出版されているが、私はなお自分で体験し理解した文革の過

程を書きあげて、読者のご叱正を得たかったのである。

文革史の研究は時代の制約、利害関係の制約、個人の感情の影響から脱却し、文革を本来の姿に立ち返らせねばならず、人類文明と現代政治文明の高みに立つてこそ、改めて文革を認識することができようであろう。官方(政府筋の公式見解)の文革史はもともとイデオロギーと政治制度にしばられており、文革の真相と食い違うことは避けられない。

中国共産党十一期六中全会が一九八一年六月に採択した「歴史決議」は、文革という歴史段階についての政府筋の結論である。この決議は一九八一年当時の政治的必要性と当時許された政治的条件をもって建国以来の歴史を記述し、評価したものである。いわばあの決議は歴史問題に関する決議というより、政治問題に関する決議であったと言った方がましである。あの決議は当時直面していた政治問題に対する折衷と妥協であった。改革開放への合意を達成するため、当時はこの種の妥協が必要であった。もしこの種の合意がなければ、その後の三十年の中国を変貌させる大活劇はありえなかった。だが歴史学者が文革の真相を復元しようとするときには、政治家のあのような妥協や調整をするわけにはいかない。

「歴史決議」は「毛沢東同志が発動した『文化大革命』のこれらの左傾の誤った論点は明らかにマルクス・レーニン主義の普遍的原理と中国の具体的実践を結びつけた毛沢東思想の道からはずれており、それらと毛沢東思想は完全に分けられねばならない」と指摘し、毛沢東が一九五六年以降に発展させてきた思想を毛沢東思想の中から切り分けたが、それは「毛沢東思想」を保全し、「信仰の危機」を救おうとするものであった。明らかに毛沢東思想を保全しさえすれば、専制制度の魂を保全でき、官僚集団の利益を保全することができたためである。この実用主義による切り分けは歴史の真実に背き、人々を説得することは難しいものであった。

官製文革史は、文化大革命は「指導者が間違っ引き起こし、反革命集団に利用されて、党と国家と各民族人民に大きな災難をもたらした内乱である」(「歴史決議」としている。この論断はまた「林彪、江青の二つの反革命集団」を中国共産党から切り離している。この種の切り分けは文革の責任を「林彪、江青の二つの反革命集団」に押しつけるためであり、それによって中国共産党を保全し、中国共産党を「信頼の危機」から救い出すためのものであった。もしこの二つの集団が本当に存在してい

たとしても、彼らは中国共産党の一部であり、彼らは党内で台頭し、党内で消滅したもので、中国共産党から切り離すことはきわめて難しい。

官製文革史は毛沢東思想をまず保全し、また中国共産党を保全し、また官僚集団全体を保全し、官製集団が引き続き執政する合法性と彼らの全利益を保全したのである。

官製文革史と政府筋の影響を受けて文革を記した書籍の中では、劉少奇は従順な綿羊のように、毛沢東の操るままになり、ついには毛沢東に末路に送り込まれたとしている。だが実際は、老革命家であり、戦いを重ね、長年党内闘争の試練を経てきた劉少奇と、彼が代表した官僚集団は文革開始と同時に毛沢東に手向かい、その失脚前には「二月要綱」で姚文元の論文「新編歴史劇『海瑞免官』を評す」に対抗し、「五・一六通知」⁽²⁾が出たのち、工作組を派遣して抵抗した。劉少奇が打倒されたのち、「二月逆流」と「二月鎮圧」⁽⁴⁾で文革に対抗し、鄧小平を代表とする一部の者は文革に抵抗した。その間、軍事官僚集団はさらに強硬に抵抗した。これら一連の抵抗は正義と非正義の抗争ではなく、利益をめぐる対立であった。この抗争の中で一般民衆の犠牲が代価とされた。劉少奇

を従順な綿羊として描いたのは、官僚集団に文革の責任を負わせないためであり、軍事、政治の官僚たちの文革期における大衆に対する残酷な悪行を覆い隠すためであった。周恩来を美化し、周が文革中に毛に密接につき従った事実を隠すのもこの目的のためであった。

官製文革史は文革の悪しき結末は「反革命集団によって利用された」結果であったとしている。これは毛沢東に責任を負わせないためであり、歴史の歪曲でもある。事実上、「王洪文、張春橋、江青、姚文元の」「四人組」なるものは一九七三年八月になって出てきたものであり、それ以前には「四人組」はまだ存在していなかった。その時、老幹部の大多数は復職していた。また「林彪集団」なるものがあつたとしても、その集団は一九六九年四月（九大全会）以降にできたものであり、一九七一年九月（林彪事件）にはなくなっていた。その前後に林彪・江青集団があつたとしても、彼らは毛沢東を支持し文革を推進する勢力であった。江青は「わたしは毛主席のイヌで、咬めと言われたら誰でも咬んだ」と言ったが、これは江青や林彪が毛沢東に利用されたもので、彼らが毛沢東を利用したのではなかったし、彼らはただ毛沢東が作り出した機会を利用して自分たちに反対する者を排除し

ただけであったということである。いわゆる二つの「反革命集団」の「反革命行為」の大部分は毛沢東の指導下で文革を推進した活動であった。

一九七六年十月の政変（四人組逮捕）以後、文革を否定することが「政治的に正しい」ということになった。そのため文革を記述する書籍の中で党内の高級幹部はすべて自分がいかに文革に抵抗し、いかに堅忍不拔であったかを吹聴し、彼らがある段階で毛沢東に追随して文革をやりに、彼らがかつて大衆の鎮圧に力を入れ、幹部の迫害に加わった事実を隠し、さらに一部の官僚は、幹部が迫害されたのをいい気味だと喜び、はなはだしきは彼らに追い打ちをかけたという事実を覆い隠している。

官製文革史には幹部が迫害された情況が多く記されている。だが実際には文革中に迫害された一般大衆は迫害された幹部の数百倍にもなるであろう。恐怖の「紅い八月」（一九六六年八月）、工作組の「反右」闘争、一九六七年の「二月鎮圧」、「一打三反」、「五・一六」摘発・批判・審査、「階級隊列の整頓」、そして一部地区での集団虐殺など一連の血腥い鎮圧は、官製文革史が漠然とぼかしたというよりも極力歪曲している。歴史は勝利者が書くものである。文革の最後の勝利者は官僚集団であり、

庶民の苦しみを軽視するのは当然のことであった。

二 文革史を書くことの難しさ

ジョージ・オーウェル（一九〇三年—一九五〇年。イギリスの作家。「動物農場」、「一九八四年」で知られる）は「私の本を書こうとするとき、完璧な本を書くべきだと自分に言うことはありえない。私が書こうと思うのは、私があんな種でたためを暴露し、人々にいくつかの事実を思い出させたいがためである」と言っている。でたためを暴露し、真相を回復させるそのことが、私がこの本を書く目的でもある。

台湾中央研究院院長の呉大猷先生（一九〇七年—二〇〇〇年。著名な物理学者、教育家）は中国近代史を書くことに求められるのは「叙事は客観的に、分析は深く」だと述べている。この点も私がこの本の執筆にあたって追求した目標であり、可能な限り歴史を本来の姿に戻すよう中立的記述に努めた。だがこの目標を達成するのは容易ではなかった。第一に、その時代の人がその時代の歴史を書くことには自分の立場や見方を持ち込みやすく、「叙事の客観性」を損なうかも知れないことである。第二に、私の学識が不足で「深い分析」をすることが非常に難し

いことである。しかし私はこの本の執筆に当たって、呉先生のこの言葉をひとときも忘れたことはない。

文革はきわめて複雑な歴史的過程であり、それは多くの側面をもつ歴史の組み合わせであり、幾重もの闘争が重なり合っている。多種の勢力と多様な役割をもった者が十年もの長い時間の次元と広い空間という次元の中で角逐と変容を繰り返してきた。各種の思想、各種のグループ、各種の利益集団の間で幾度となく繰り返された闘争もあり、互いに混じり合い、互いに絡み合っていた。

ある時は勝利者であり、また別の時には敗北者である。ある時は人を痛めつけ、また別の時には人に痛めつけられる。痛めつけた者が痛めつけられ、痛めつけられた者がまた人を痛めつける。「肯定」するか「否定」するかという黒白をつける単純な思考をもって、この複雑な歴史の過程を記録し、記述することはできないであろう。

文革史を書くことは難しいことである。誰かがなんらかの理由で、ある論点を示すと、常にまた誰かが理由をあげて反論する。誰かがある歴史事件を書けば、また常に誰かがその記述の一面性を批判する。それは文革の当事者の多くが健在で、それらの人々は、文革の中で演じた役割、条件、視角、体験が異なるからである。当事者

のこうした批判は貴重であり、研究者に歴史の真実により近づくようたえず迫るものである。その時代の歴史をその時代の人が書くことよってのみ、この種の貴重な資源を獲得できるのだが、また当然それは当代の人が当代の歴史を書くことの難しさでもある。

文革の先行研究者と比較すれば、私は後学の徒である。後学者には後学者のよいところがあり、ゼロから始める必要はなく、先行研究者の優れた仕事私の起点であった。大量の先行研究の大量の著述を読んだ。それには宏大な叙事的文革通史、文革経験者の回想録、重要な特定問題に対する深い研究、地区別の文革史、文革理論の探究などがある。これらの著作を読むとき、私の頭の中には次のような名前が深く刻まれている。高皋、嚴家祺、王年一、卜偉華、席宣、金春明、ロデリック・マクファール、王友琴、周倫佐、何蜀、王紹光、王力、陳曉農、吳法憲、邱會作、李作鵬、徐景賢、聶元梓、余汝信、劉国凱、徐友漁、宋永毅、胡平、丁抒、郭建、高文謙、高華、印紅標、韓鋼、蕭喜東、丁東、陳益南、唐少傑、錢理群、張博樹、朱學勤、陳奎德、王若水、王海光、王希哲、王力雄、楊曦光、舒雲、丁凱文、徐海亮、啓之、司馬清揚、周孜仁、華新民、阿拉滕德力海、舍那木吉拉、

金光耀、金大陸、李遜、董国強、鄧振新など。

さらに貴重なのは一部の研究者が他の研究者の舞台となり、黙々と史料を収集し、整理、選別したことである。傅斯年は、ある意味から言えば、歴史学は史料の学問であると言っている。宋永毅、丁抒、郭建らの『中国文化大革命文庫』、周良霄・顧菊英夫妻の『十年文革大事記』、また『記憶』、『昨天』、『往事』、『文革博物館』の類の文革史料デジタル刊行物の編集者がいる。彼らは不滅の貢献をした。私は数年来の研究著作の過程において常にこれら先行研究者に深い敬意を抱いてきた。徐友漁、丁東、卜偉華、余汝信、李遜、叢文滋は本書の初稿全文を仔細に読み、何蜀、蔡文彬、徐海亮、王海光、宋以敏は『天地翻覆』の初稿の一部を読んでくれた。彼らは多くの貴重な意見を提起してくれた。定稿にした後、余汝信、孫立川は全体を校閲し、また一部の改訂の意見をだしてくれた。ここでそれらの人々に深い謝意を表明したい。

二〇一五年八月

楊 繼 繩

目次

日本の読者へ

- 一 文革から五十年、だがその研究はまだ十分ではない
- 二 改革開放後に現れた社会的不正
- 三 毛沢東左派は社会的不正をどう見ているか
- 四 自由主義者は社会的不正をどう見ているか
- 五 執政当局はこの二つの動きにどう向き合っているか

序文

- 一 「歴史決議」は政治問題に関する決議
- 二 文革史を書くことの難しさ

凡例

中国地図

第一部 文革の起源から終焉まで

..... 1

第一章 文革の予兆 4

第一節 文革の起源 4

第二節 導火線 5

第三節 文革への障碍を除く 6

第二章 文革の正式発動から全面的奪権へ 10

第一節 文革の正式発動 10

第二節 劉少奇、鄧小平が右派を捕らえる 11

第三節 八期十一中全会 12

第四節 「老紅衛兵」の「四旧」一掃 13

第五節 プルジョア階級反動路線批判 15

第六節 全面的奪権 16

第三章 「二月逆流」と武漢事件 19

第一節 「二月逆流」と「二月鎮圧」 19

第二節 「鎮圧」に対する反撃 20

第三節 武漢事件と毛の文革戦略の転換 21

第四節 全国の山河は紅一色 24

第四章 権力者の大衆弾圧 27

第一節 「五・一六反革命集団」分子の摘発・批判・審査 27

第二節 階級隊列の整頓 29

第三節 「一打三反」運動 30

第四節 集団虐殺 31

北京近郊の集団虐殺／湖南道県の大虐殺／広西チワン族自治区の大虐殺／他地域での集団虐殺

第五章 九全大会から林彪事件まで 35

第一節 九全大会 35

第二節 九期二中全会 36

第三節 「批陳整風」運動から林彪事件まで 40
国家主席は必要か／「政治的武器」について／誰が林彪の後継者か

第六章 林彪事件 42

第一節 「五七一工程」 42

第二節 事件直前のクーデター組織の動き 43

第三節 周恩来側の阻止行動 44

第四節 林彪墜死と前後の情況 47

第五節 林彪事件の謎 50

第七章 毛周対立 53

第一節 毛の右傾批判と周の左傾批判 53

第二節 キッシンジャーの支援提案 55

第三節 周恩来批判と鄧小平の職務回復 56

第八章 「批林批孔」から「四五運動」まで 58

第一節 批林批孔運動 58

批林批孔運動の背景／批林批孔運動の発動

第二節 毛の周批判 60

第三節 「右からの巻き返しに反撃する」運動と『水滸伝』批判 61

第四節 周恩来の死と「四五運動」 63

周恩来の死／「四五運動」／毛の死、十月政変

第九章 文革の幕閉じる 66

第一節 毛沢東死去 66

毛の晩年と生涯／毛死去の報道

第二節 毛死去の受けとめ方 70

第十章 一触即発 73

第一節 二つの政治勢力 73

異なる政治的方向／吊問式の様子／張春橋の所感

第二節 毛死去前後の江青 75

天津と大寨の江青／毛の文書をめぐる攻防／政治局会議での激論

第三節 華国鋒と「四人組」 79

文革派の現実／「四人組」の危機感／既定方針通りにやれ

第十一章 十月政変 84

第一節 「四人組」・文革派処分の戦略 84

強硬措置の大義名分／葉剣英の考え／華国鋒・李先念・葉剣英の動き

第二節 江青の動向 87

「投鼠忌器」／毛の死に際しての江青

第三節 「四人組」逮捕の実行 89

逮捕の準備／王洪文・張春橋・姚文元の逮捕／江青の逮捕

第四節 メディアの制圧 92

第十二章 鄧小平の反応と上海の情況 95

第一節 鄧小平の反応 95

鄧小平一家の喜び／華国鋒宛の直筆書簡／各地の慶祝デモ

第二節 文革派の基地、上海の情況 97

馬天水ら消息不明に／上海市幹部の緊急會議／中央の説得

第十三章 十一全大会と林彪・四人組裁判 101

第一節 十一全大会 101

第二節 「林彪・江青反革命集團」公開裁判 101

第二部 ポスト文革の中国…………… 105

第一章 ポスト文革の大規模な摘発・批判・審査 107

第一節 冤罪捏造誤審事件の名誉回復 107

第二節 文革派の摘発 108

第二章 摘発・批判・審査運動の拡大(一) 110

第一節 河南省の運動の実態 110

第二節 雲南省の運動の実態 115

第三節 天津市の運動の実態 116

第三章 摘発・批判・審査運動の拡大(二) 119

第一節	湖北省の運動の実態	119
第二節	山西省の運動の実態	121
第三節	四川省の運動の実態	122
第四章	摘発・批判・審査運動の拡大(三)	125
第一節	湖南省の運動の実態	125
第二節	吉林省の運動の実態	125
第三節	黒龍江省の運動の実態	126
第四節	上海市の運動の実態	126
第五節	浙江省の運動の実態	127
第六節	福建省の運動の実態	128
第七節	江西省の運動の実態	129
第八節	甘肅省の運動の実態	129
第九節	軍隊の運動の実態	131
第十節	公安部の運動の実態	133
第十一節	文革期の思考と手段を使って	135
第五章	胡耀邦、摘発・批判・審査の拡大を阻止	137
第一節	胡耀邦の警鐘	137
第二節	曹操の故事	138
第六章	「三種人」の清算とその矛盾	140

第一節 鄧小平の号令

140

第二節 「三種人」の摘発・批判・審査

141

第三節 文革中の政治的態度の調査

143

第七章 「三種人」清算のダブルスタンダード

145

第一節 老幹部と幹部の子弟には寛大

145

第二節 陳楚三の回想

146

第三節 孔丹、董志雄の陳雲あての手紙

147

第四節 官僚集団のための逃げ道

151

第八章 大規模な摘発・批判・審査運動のプラス効果

153

第一節 冤罪捏造誤審案件の名誉回復

153

第二節 必要な処罰の執行

155

第三節 大虐殺事件の善後処理

158

第九章 官僚体制下の改革開放

161

第一節 文革後の主要な四大政治勢力

161

第二節 華国鋒の「二つの凡て」

163

第三節 奇怪なねじれ現象

165

第四節 真理の基準の大議論

166

第十章 逆巻く民主の怒濤

169

第一節 「西単の壁」

169

第二節 理論工作討論会

172

第十一章 現代版「中体西用」

176

第一節 改革開放への共通認識

176

第二節 「四つの基本原則」と壁新聞の非法化

178

第三節 「建国以来の党の若干の歴史的問題についての決議」

180

第四節 「一つを中心、二つの基本点」

181

第十二章 権力市場経済制度

184

第一節 官僚人員の過剰

184

第二節 権力市場経済制度の出現

187

第三節 改革が生み出した貧富の格差

189

第十三章 階層の固定化と階層間の衝突

191

第一節 集団世襲

191

第二節 「窮二代」の悲劇

192

第三節 階層間の摩擦・衝突の激化

196

第十四章 権力の抑制均衡と資本の制御

198

第三部 文革五十年の総括

第一章 毛沢東の文革発動の動機

203

第一節 「天地翻覆」

203

第二節	文革発動の要因	204
第三節	ユートピア建設への露払い	206
第二章	毛沢東路線のイデオロギー的背景——継続革命論	209
第一節	官製イデオロギーの呪縛	209
第二節	中共のイデオロギー	210
第三節	継続革命論	211
第四節	イデオロギーがもたらした悲劇	213
第三章	文革の根本原因は建国後十七年の社会制度	216
第一節	全体主義制度	216
第二節	毛沢東の「官僚主義者階級」への不満	218
第三節	ジラスの「新しい階級」への幻滅	220
第四節	官僚集団こそが勝者、毛沢東は敗者	222
第四章	文革の代価、遺産と社会の要求	225
第一節	旧制度の完全復活	225
第二節	文革が残した「遺産」	226
第三節	立憲民主制度の必要性	228
編者あとがき	私と文革	231

文化大革命關係年表 35

主要中國人名注 19

訳注 11

原注 7

人名索引 1

凡例

一、本書は、著者・楊繼繩氏が本書のために「一小時読懂文革全貌」(未発表稿)「一時間で分かる文革の全貌」、『天地翻覆——中国文化大革命史』上下(香港・天地圖書有限公司、二〇一六年十二月)など著者の文革関係著作に加筆修正を加えたものを編集、翻訳した新著である。

二、第一部は「一小時読懂文革全貌」、第二部は『天地翻覆』の第二十八・二十九・三十二章の抜粋修正稿、第三部は同書の「導論」の翻訳である。本訳書では編者の判断で「導論」を文革の総括研究であると位置づけて、第三部に置いた。

三、章と節のタイトルは編者の判断で日本の読者に分かりやすく改めた。項の小見出しは原文にはないが、編者が内容のまとまりごとに設定した。

四、本文中のパーレン()は著者による原注である。キッコ()は訳注である。原注のうち文献注は省略し、本文の内容に関わるものに限定した。長めの訳注は巻末にまとめた。

五、毛沢東や劉少奇、周恩来など主要な中国人については本文の初出時に*を記し、「主要中国人人名注」を作成し、巻末にまとめた。

六、改行は原文に従ったが、読者の読みやすさを考慮して多めに施した。

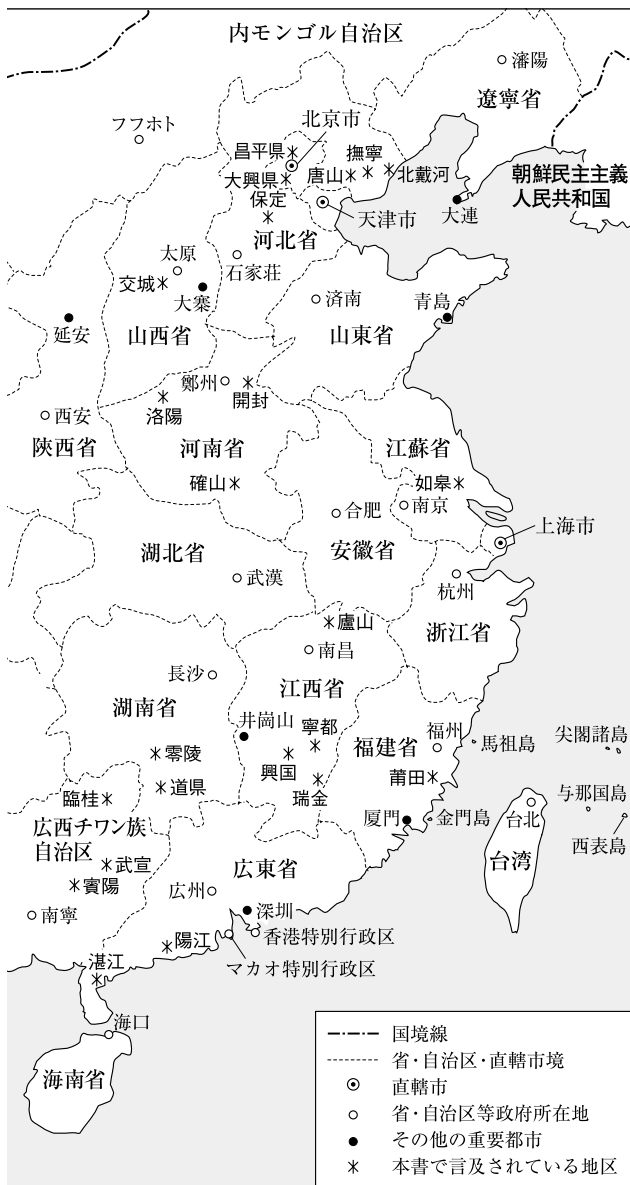
七、中国の機関、会議などの主な略語は次の通りである。

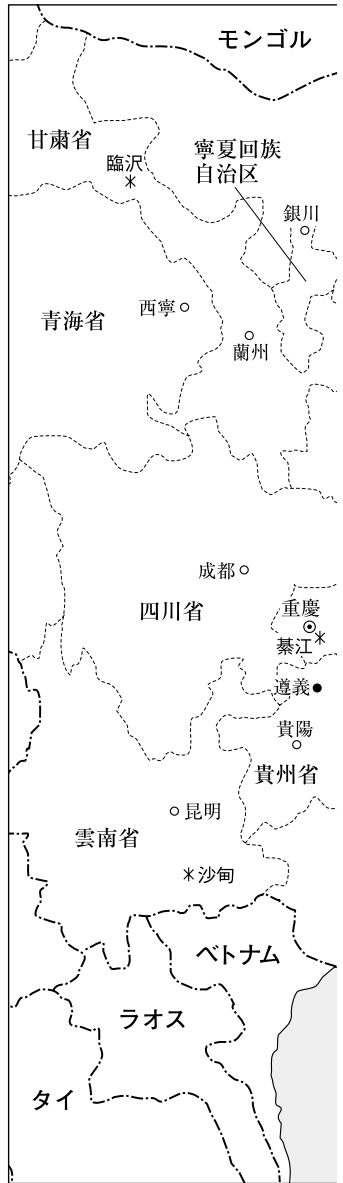
中国共産党↓中共、中国共産党第九回全国代表大会↓九全大会、中国共産党第八期中央委員会第十

回全体会議↓八期十中全会、全国人民代表大会第五期第三回会議↓第五期全人大第三回会議

八、國務院各部の名称、役職名は、原則として國務院総理、外交部、外交部長、外交部副部長など、中国語の表記のままとした。

九、「文化大革命関係年表」は、嚴家祺・高舉『文化大革命十年史』所収の故・安藤正士筑波大学名誉教授と編者の作成した年表をもとに訳者の一人である望月暢子が作成した。





第一部 文革の起源から終焉まで



文革中の上海の街頭で「ブルジョア的である」としてハイヒールのかかとを切り落とす女性。

文化大革命は、毛沢東、造反派、官僚集団三者間の三角ゲームであった。毛は大衆を動員し、官僚集団を肅清するために造反派が必要であったし、また毛は秩序を回復するために官僚集団が必要であった。社会を管理し、公共財を提供するには階層制度（つまり官僚制度）を欠くことはできなかった。そのため毛は官僚集団と妥協せざるをえなかった。この三角ゲームの最終結果は、勝利者は官僚集団、失敗者は毛、失敗の苦い果実を呑み込まされたのは造反派であった。毛が「腐敗した古い国家機構」を瓦解させる手段とし、官僚集団を叩く石とされた造反派は、最後にはその回転が止まることはない官僚マシーンによって粉砕されたのである。

第一章 文革の予兆

第一節 文革の起源

文革の起源はそれ以前の十七年の制度の中にあつた。それは高度に権力が集中した集権制度であつた。国家は一切の資源を独占し、各人の生活を厳密に管理し、経済、政治、思想、情報を独占していた。高度に独占的な政権は官僚集団による運用に依存していた。膨大な官僚集団は広範な大衆を抑圧し、階層の高低によつて異なる特権を享受し、官民の対立は重大化していた。官僚の変質を防ぎ、官民の矛盾を緩和するため、毛は一度ならず大衆に官僚集団の暗黒面を摘発させた。だがその暗黒が發生する根本的原因は、極度に権力が集中した全体主義制度にあり、暗黒面を暴露するにはこの制度に打撃を加えるべきであつたが、それには超えることができない限界があつた。この制度に打撃を加えようとした人々は

次々とこの制度に呑み込まれ、さらに官民の矛盾が激化した。毛は官僚システムを通さず、彼自身が大衆を動員して官僚の暗黒面を摘発し、官僚の変質を阻止する方策を探し求めていた。長年の模索をへて、彼はこうした形式、つまり「プロレタリア文化大革命」という方策を探し当てた。

この政権はすべての資源を動員して毛の神格化を進めた。毛に至る最高の権威を持たせ、毛の「指示」は法律、政策、道徳、是非の判断を超えた善悪の唯一の標準となつた。毛に対する個人神格化は全人民の愚民化に対応するものであつた。人々は党が知らせるものだけを知り、党が信じさせるものだけを信じた。毛の絶対的権威と億万の政治的愚民が共存していたことが文革発動の重要な条件であつた。毛の号令が下るや、政治的愚民たちは毛が示した方向にそつて狂奔したのである。

毛は心中のユートピア実現のために一九五八年には

「三面紅旗」^[1]を実施し、三、四千万人が餓死した。大飢饉の責任追及と大飢饉以後の善後策について毛と劉少奇の考えの違いが大きくなり、上層部での政治闘争も過激化した。一九六二年の八期十中全会で毛は階級闘争というこの「神通力のある宝物」を使って、反対勢力を抑圧した。「三面紅旗」は失敗したが、毛はそのユートピアを放棄せず、文革を通じてユートピアを実現する条件を創造することを考えていた。

階級とは本来経済の範疇の概念である。一九五六年、社会主義改造が終わり、経済上は階級が消滅したが、毛は政治、思想上での階級敵を探し求めた。同年、ソビエト共産党第二十回大会でフルシチョフがスターリンの過ちを暴露し、「平和共存」、「平和移行」、「平和競争」の国際関係における方針を提起し、この後さらに中国の「大躍進」^[2]と人民公社を批判した。毛はこのことからソ連共産党はすでに修正主義分子に権力を奪われたと考えた。「反修防修」(修正主義に反対し、修正主義を防止する)が重要な政治的任務となり、それは文革の目的ともなった。一九六三年から六四年の中ソ論争^[3]は実際には国内での修正主義反対を高め、文革への世論を準備するものであった。

毛の階級闘争理論、中ソ大論戦、そして国内のイデオロギー分野での革命的大批判、都市・農村での社会主義教育運動^[4]は、次第に完成した理論体系、つまり「プロレタリア階級独裁下での継続革命の理論」を形成するもので、それは文革の指導思想となった。文革前夜と文革期間中、ほぼすべての人がこのイデオロギーの強大な魔力のとりこととなり、自覚的にこのイデオロギーのために戦ったのである。

このような制度、このような路線、このようなイデオロギーは必然的に次々と事件を醸成することになる。前の一つの事件が次の事件の原因となり、後の事件は前の事件の結果となる。一連の事件による変動、矛盾の積み重ねと激化が、文革というさらに重大な事件の発生を促進することになった。

第二節 導火線

一九六五年十一月十日、上海の『文匯報』(上海拠点の総合全国日刊紙)は姚文元が執筆した呉晗の「海瑞免官」^[5](明代の清廉潔白な官僚(清官)、海瑞(一五二五年—一五八七年)の活躍を描いた京劇)を批判する文章「新編歴史劇「海瑞

免官」を評す」を発表した。この文革の導火線となる文章は起草から発表まですべて毛個人が決定し、党中央に対して八カ月もの間秘密にされた。毛がこの文章を書かせたのは大飢饉以来の紛糾から来ていた。一九五九年四月の八期七中全会の会期中、毛は明朝の清官である海瑞を学習するように提議し、歴史学者を招いて研究させ、文章を書くように提案した。それは大躍進以来、誰も彼に本当の話をしなくなったため、官僚たちが海瑞のようにあえて本当の話をすることを目指すものだった。一九五九年の廬山会議⁽⁵⁾で彭德懷は本当に海瑞となったが、毛の怒りを買ひ、官を罷めさせられた(彭德懷はこの会期中、大躍進を批判する意見書を毛に提出したが、反撃を受けて失脚した)。明史の専門家で北京市副市長の呉晗は海瑞を研究せよという毛の呼びかけに応じて脚本「海瑞免官」を書き、一九六一年二月に北京で初演された。江青と康生はこの芝居を「政治的過ちあり」と考えた。

姚文元の文章は『文匯報』で発表の後、党華東局(局は中共の党組織で一九五〇年代に中央と省の間に置かれた。現在は廃止)に所属する各省の党機関紙がすぐに転載したが、北京市党委員会第一書記の彭真と党中央宣伝部長の陸定一は北京の新聞に掲載させなかった。十一月三十日にな

って『人民日報』はやっと「學術研究欄」に転載した。北京の抵抗は毛に「北京は針一本刺せず、水一滴通させない」という見方を深めさせることになった。

第三節 文革への障除

毛が呉晗を批判した主な目的は、「彭德懷の名誉回復」を阻止し、「一九六二年九月の」八期十中全会で提起した階級闘争を展開するため、具体的目的は彭真の態度を探るためであった。毛が彭真を注意して見ていたのは、七千人大会⁽⁶⁾で彭真が毛の「大餓死」事件に対する責任を追及したことであり、さらに重要な原因は彼が劉少奇の「派閥」の重要な中核だったからである。

一九四九年の中国共産党による政權樹立後、劉少奇といふこの「派閥」の幹部は党と政府の指導的な重要なポストを占拠し、かつその勢力を強めてきた。劉少奇閥の膨張は毛の不安を引き起こしただけでなく、その他の「派閥」の不満も引き起こした。

一九四九年以降の毛の劉少奇への不満は「四清運動」⁽⁷⁾で公にされた。一九六五年に毛は劉少奇肅清の決心を固めた。劉少奇を肅清するには、まずその腕を切り落とす

ことが必要であった。彭真がその最初の目標とされた。

一九六六年二月三日、彭真は「文化革命五人小組」拡大会議を招集し「二月要綱」起草した。この「要綱」は呉晗に対する批判を学術の範囲内に限定し、政治的批判とすることには賛成しなかった。

一九六六年三月三十日、毛は康生、江青、張春橋に「二月要綱」は階級のけじめをこちゃまぜにし、是非を分けていないと語った。

一九六六年四月十六日から二十四日まで毛は杭州で政治局常務委員会拡大会議を主宰し、「二月要綱」を撤回させ、彭真を批判し、彭真は失脚した。食後の散歩に際して六大区の書記は一人として彭真と一緒に歩き、話をしようとしなかった。会議の終了後、党中央は李雪峰、宋任窮が彭真とともに飛行機で北京に戻るように定めた。機上で三人は顔をつきあせて座ったが話をするとはなかった。一度毛の信任を失えば、その他の者は彼と一線を画し、距離を置き、追い打ちをかけることさえあった。

姚文元の論文「新編歴史劇『海瑞免官』を評す」の発表と同じ日、楊尚昆の中央弁公庁主任の職務が解かれた。楊尚昆は後に「もし中央弁公庁の任務から自分を降ろさなければ、自分は『文革』発動の邪魔となっていたら

う。だからまず自分に刀を振るわれたのだ」と言っている。

一九六二年秋から林彪は戦争当時の古傷が再発し、病気休暇をとらざるをえなかった。軍事委員会を主宰する仕事は当時軍事委員会の二番目の副主席であった賀龍のところに行った。邱会作は、羅瑞卿は林彪の健康は回復しないと考え、林彪と疎遠になり、賀龍に近づいたと見ていた。軍内では次第に二つの陣営が出来始めた。賀龍、羅瑞卿が一方であり、林彪やその他古参指揮官らがもう一方であった。毛は賀龍を信頼せず、彼がクーデターをやることを心配していた。

一九六五年、羅瑞卿は党中央書記処書記、國務院副総理、中央軍事委員会秘書長、総参謀長など十三の重要な職務に就き、多忙をきわめていた。だが一部の元帥や大将はやることなく、ある元帥が分担した仕事は羅瑞卿の管轄下であったりした。権力の配分のバランスが崩れ、それに羅瑞卿の「霸道」的なやり方が元帥たちの羅に対する不満を引き起こしていた。

一九六五年十二月八日から十五日まで上海で政治局常務委員会拡大会議が開かれた。会議三日目の夜、周恩来は呉法憲を昆明に派遣し、雲南を視察していた羅瑞卿を

上海に連れてこさせた。羅瑞卿は上海に着くや軟禁された。周恩来と鄧小平が羅と話をし、羅の問題を三項目に要約し指摘した。一に林彪に反対し、林彪を封じ、突然林彪を攻撃した、二に政治を突出させることに反対し、三に党権力に手を出した、の三点であった。上海の会議が終わるや羅の総参謀長の職務は解かれ、楊成武が総参謀長代理になった。葉劍英も軍事委員会副主席に昇格し、間もなく軍事委員会秘書長を兼務し、軍事委員会の仕事を主導することになった。

一九六六年三月四日、葉劍英が主宰し京西賓館(中国人民解放軍の専用的高级宿舍)で羅瑞卿批判の会議が招集された。三月十八日、羅はビルから跳び降り自殺を図った(死にせず、大腿部重傷)。葉劍英は「將軍一跳身名裂」⁽⁹⁾との句を詠んだ。劉少奇は「跳び降り自殺とはよく考えたものだ。頭から落ちるべきなのに、足から落ちた」、鄧小平は「ノッポの羅は足から飛び降りたのさ」と語っている。

陸定一失脚の発火点は妻の嚴慰冰^{*}の匿名の手紙であった。

たぶん一九六〇年頃から一九六六年一月まで陸の妻の嚴慰冰は数十通も匿名の手紙を書き、その九割は林彪一

家に送られた。手紙の内容は主に林豆豆(林彪の一人娘、本名は林立衡)と母親である葉群^{*}の関係を誹ることから始まり、豆豆は林彪の娘ではなく、劉少奇に似ていると述べていた。また葉群は「王実味の情婦だった」とも書いていた。

一九六六年五月二十日午後、中央政治局拡大会議の第一回全体会議の開会前、各人の卓上には一枚の林彪の自筆の書類が置いてあり、その字はクルミ大で次のように記されていた。

「私は証明する——①私と葉群が結婚したとき、葉は純潔な処女であり、結婚後も一貫して正しかった。②葉群と王実味が恋愛したことは絶対にない。③老虎(林彪の息子の林立果^{*}の幼名)と豆豆は私と葉群の嫡出子である。④嚴慰冰の反革命書簡の内容はすべて嘘である。 林彪 一九六六年五月十四日」

会議の場で林彪は陸定一に詰問した。「お前は女房と一緒に匿名の手紙で長い間、葉群同志と我が家を陥れようとしたが、目的は何だ? はっきり言え」。陸「嚴慰冰が匿名の手紙を書いたことなど知らない」。林「自分

の女房のことを知らないのか。なんで知らないんだ?」。陸「亭主は女房のことで知らないことが多いんじゃないか?」。林「お前を射殺できないのが残念だ!」。林彪は机を叩いて悪罵した。「お前ら二人は毎日ベッドで××〔原文伏せ字〕しているのに、それでも知らないのか?」

周恩来も陸定一を非難しただけでなく痛罵し、茶碗を陸の座っているほうに投げつけた。楊成武は陸の前に駆け寄り、拳骨を陸の目の前で振り回しながら「これがプロレタリア独裁だ!」と言った。

陸定一は彼の伝記作者に「嚴慰冰が匿名の手紙を書いたのは、彼女が精神病だったからだ」と語っている。

陸定一の失脚が妻のとはつちりを受けたものだというなら、それは簡単過ぎるだろう。

陸は長い間、イデオロギー部門で仕事をしてきた。文革の一連の思想批判運動の中で彼は重要な役割を果たしてきた。だが「大餓死」事件以後、毛は彼に不満をもつようになった。一九六三年十二月十二日、毛は、文化界に関する二つの指示の中で「多くの部門はいまなお死人が支配している」、「やはり修正主義とほとんど同じまになり下がっている」と述べた。林彪が江青に委託した軍の文芸工作座談会の紀要は、文芸界では建国以来、

「反党反社会主義の反動的修正主義路線によつて独裁が行なわれてきた」と記している。これはすべて陸定一が指導してきた部門であった。

一九六六年三月二十八日から三十日まで毛は康生との二回にわたる談話で党中央宣伝部を批判し、「中央宣伝部は閻魔殿だ。『閻魔を打倒して小鬼を解放せよ!』」と語った。

陸はただちに軟禁され、とんがり帽子を被せられ、黒々と罪状が書かれた札をかけられ、批判闘争にかりだされた。さらに隔離審査となり、拷問を受けた。「訊問する者がどつとなだれ込んで来て手錠をかける者は手錠をかけ、耳をひっぱる者は耳をひっぱり、陸は思わず悲痛の叫び声をあげ、聞く者は震え上がった」。周恩来の批准を経て「彭徳懐、羅(瑞卿)、陸(定一)、楊(尚昆)」は何回も大規模な大衆集会で批判闘争を受けた。足を折った羅瑞卿は大きな駕籠で闘争大会の会場に担ぎ込まれて来た。

第二章 文革の正式発動から全面的奪権へ

第一節 文革の正式発動

一九六六年五月十六日、劉少奇が主宰する政治局拡大会議で「中国共産党中央委員会通知」、いわゆる「五・一六通知」が採択された。

この「通知」は毛沢東が四月に杭州で「二月要綱」を繰り返し批判した談話をもとにして書かれたもので、原稿の完成後も毛は何度も手を入れた。「通知」は「党内、政府内、軍隊内および文化界の各方面にまぎれこんだブルジョア階級の代表者は、反革命修正主義分子であって、いったん機が熟せば、権力を奪取して、プロレタリア独裁をブルジョア独裁に変えようとする。これらの人物のうち、一部の者はすでに我々によって見破られているが、一部の者はまだ見破られておらず、しかも一部の者は現に我々から信頼され、我々の後継者として養成されてい

る。たとえば、今我々の身边に眠っているフルシチョフ式の人物がそれである。各級の党委員会はこの点に十分注意しなければならぬ」と述べていた。

「五・一六通知」は文革を発動する綱領的文献であった。

五月二十八日、中央文革小組が正式に成立し、それは毛の直接的指導下におかれた特殊な組織であった。毛は陳伯達を組長に任命したが、実際は副組長の江青が仕切っていた。一九六六年五月二十五日、北京大学の聶元梓ら七人は「宋碩、陸平、彭珮雲は文革の中で、いったい何をやっているのか」との大字報を貼り出した。六月一日、毛はこの大字報について「この文章は新華社を通じて広く伝え、全国の各紙で発表することが十分に必要である。北京大学というこの反動派の堡壘はここから打破を始めてよい」との指示を出した。大字報のことが伝えられると毛は「全国最初のマルクス・レーニン主義の大